

小学校の臨海学校（遠泳）における実践報告

豊田誠一郎^{*1}・坂本将基^{*2}・小澤雄二^{*2}・齋藤和也^{*2}
井福裕俊^{*2}・中川保敬^{*2}

A practice report on a seaside school (swimming) in elementary school

Seiichiro TOYODA, Masanori SAKAMOTO, Yuji OZAWA, Kazuya SAITO,
Hirotoishi IFUKU and Yasutaka NAKAGAWA

はじめに

熊本大学教育学部附属小学校では、例年、熊本県立あしきた青少年の家にて、5年生児童を対象として300mの遠泳を中心とした臨海学校を行っている。その意義は、平成29年告示の小学校学習指導要領解説 特別活動編¹⁾でも示されている。なお、この行事は、50年以上の歴史を誇り全国でも稀にみる試みであり、遠泳を中心とした二泊三日の臨海学校を通して、テーマである「自主、自立、鍛錬、協力」の精神を育むことを目的としている。今回は、平成30年度の臨海学校（遠泳）について報告したい。

1 実践の概要

- (1) テーマ
自主、自立、鍛錬、協力
- (2) めあて
 - ① 遠泳やマリ活動を通して、心と身体を鍛える。
 - ② 自然体験を通して、自然に親しみ、自然を大切に
する気持ちをもつ。
 - ③ 水俣病資料館の見学と語り部の方の話を聞く活
動を通して、水俣病や生活環境を守る取り組みに
ついて正しく理解し、今自分にできることを考
える。
 - ④ 自分のことは自分で言い、また、協力すべきと
ころは友達と協力しながら自主的に活動する。
- (3) 期日
平成30年7月18日(水)～20日(金) (二泊三日)
- (4) 場所
 - ① 芦北町立鶴ヶ浜海水浴場（遠泳）
 - ② 水俣病資料館（見学）
 - ③ 熊本県立あしきた青少年の家（宿泊）

(5) 参加児童及び引率者

- ① 参加児童108人
- ② 引率者19人

(6) 引率者の役割分担及び人数

全体指揮については、副校長、教頭、主幹教諭が行う。具体的な活動の役割及び人数については、遠泳指導を全職員で、キャンドルの集いを2人、磯観察を2人、星の観察を2人、ペーロンを2人、生活指導を2人、保健指導を1人で担当する。

(7) 集団行動のきまり

- ① 素早く、静かに整然と行動する。
 - ② 集合はゆとりをもって5分前にする。
 - ③ 先生や班長の指示を守る。
 - ④ きちんとした服装、気持ちのよい挨拶、言葉遣い、態度をとる。
 - ⑤ 水俣病資料館、あしきた青少年の家でのマナーを守る。
 - ⑥ 自分の持ち物は、自分で責任をもって整理及び保管する。
 - ⑦ 自然を大切にする。
 - ⑧ 自分の健康状態は、自分で注意する。
- ## (8) 安全面における留意点
- ① 遠泳に伴う安全をしっかりと確認しておく。
 - ② 火災に伴う安全をしっかりと確認しておく。
 - ③ 宿泊地や見学地における安全をしっかりと確認しておく。
 - ④ 不審者等に対する安全をしっかりと確認しておく。

2 遠泳に向けた練習（授業時間外）

- (1) 目的
臨海学校での300m遠泳に向けた練習を行い、自信をもって遠泳に臨むことができるようにする。
- (2) 指導者
5年生担任及び引率者
- (3) 対象児童
プールにて300m泳ぐことができない児童及び

*1 熊本大学教育学部附属小学校

*2 熊本大学大学院教育学研究科

希望者（18人）

(4) 練習時間

13：15～13：45（30分間）

(5) 練習日

計9回（6月27, 29日, 7月2, 4, 6, 9, 11, 13, 16日）

(6) 留意事項

- ① 練習を行う児童においては、保護者の参加の了承を得た上で指導に当たる。
- ② 練習前後の健康観察を必ず行う。



図1 遠泳練習の様子

3 臨海学校結団式

(1) 目的

引率者の確認を行い、安全に臨海学校を進めていこうとする態度を養う。

(2) 日時

平成30年7月10日（火） 13：20～13：40

(3) 参加者

5年生児童108人, 引率者18人

(4) 結団式の流れ

13：20 開会

副校長先生の話

13：25 引率の先生の紹介

13：35 児童代表挨拶

13：40 閉会



図2 職員による遠泳練習のまとめ

4 海洋研修Ⅰ（遠泳練習）

(1) 活動時間

1日目 15：00～16：40

(2) 活動の流れ

14：40 青少年の家前集合（5分前にトイレを済ませて整列しておく）

- ・健康観察
- ・準備物の確認

14：45 青少年の家出発

14：55 研修場所到着, 準備

15：00 点呼, 準備運動, 内容説明

15：05 水慣れ

- ・胸の深さ付近を岸に平行に泳ぐ（約80m）

15：20 休憩

15：30 遠泳練習（約100m）

- ・泳法指導
- ・1.5～2mの深さ付近で泳ぐ（図1）

16：10 点呼, 整理運動, まとめ（図2）

5 海洋研修Ⅱ（遠泳練習）

(1) 活動時間

2日目 9：00～11：20

(2) 活動の流れ

8：45 青少年の家前集合（5分前にトイレを済ませて整列しておく）

- ・健康観察
- ・準備物の確認

8：50 青少年の家出発

9：00 研修場所到着, 準備

9：15 点呼, 準備運動, 内容説明

9：20 水慣れ

- ・胸の深さ付近を岸に平行に泳ぐ（約100m）

9：50 休憩

10：00 遠泳練習（約140m）

- ・前後の間隔は, 5mを目安とする

11：20 点呼, 整理運動, まとめ

6 海洋研修Ⅲ（遠泳本番）

(1) 活動時間

2日目 13：00～14：50

(2) 活動の流れ

12：50 ビーチ集合（5分前にトイレを済ませ

て整列しておく)

・健康観察

13:00 点呼, 開会, 準備運動, 心構え, 学級ごとに士気を高める (図3)

13:20 遠泳 (300m)

・前後の間隔は, 5mを目安 (図4)

・足のつかない深さで

14:50 点呼, 整理運動, まとめ

(3) 遠泳の時間

遠泳の本番には, 90分の時間を予定している。潮の流れや天候などの自然状況で, 前後するが, ゆとりをもった時間を設定している。今年は, 若干早めに終了した。

(4) 泳ぎ方

泳ぎ方は, 平泳ぎとしている。長時間泳ぐのに適した平泳ぎで泳ぐことを, 練習の段階から指導し, 本番においても全ての子どもが平泳ぎで泳ぐようにした。

(5) 隊列

隊列は, 一列で泳ぐこととしている。縦横に隊列を組んで泳いでいくことが一般的だが, 引率者が一人一人の安全を確認しながらサポートしていくために, 間隔をとって一列での隊列としている。



図3 学級ごとに士気を高める



図4 遠泳本番における前後の間隔

7 海洋研修時の監視体制 及び事故発生時の対応

(1) 海洋研修時の監視体制

海洋研修Ⅰ・Ⅱ・Ⅲともに職員と遠泳補助の学生(熊本大学と連携して, 15人の学生を派遣していただいている)を配置し, 監視を行う。その際には, 以下の点に留意する。

- ① 職員は, ライフジャケットを着用し, 笛と救命具を持って所定の場所につく。
- ② 職員2人は, カヌーに乗り監視する (図5)。
- ③ 本部 (沿岸の中央部) から, 管理職が全体を監視する。
- ④ 本部に, 養護担当の職員, 拡声器, 携帯電話, AED, 5年児童の緊急連絡先を置く。
- ⑤ 子どもたちは, ブイ (ロープ) と職員の間を泳ぐ。

(2) 通過の確認・伝達

職員は, 目の前を子どもが通過したら, 隣の職員へ通過の伝達を次のように行う。なお, カヌーに乗っている職員は, 子どもたちの監視を行うとともに, 通過の確認・伝達が確実に行われているかチェックを行う。

- ① 同じ番号の3人の子どもたちがまとまって通過



図5 遠泳本番におけるカヌーによる監視

した場合

例: 「〇〇番の青, 赤, 黄, 通過しました」

- ② 同じ番号の2人が通過し, 一人が遅れている場合

例: 「〇〇番の赤, 黄, 通過しました。青は遅れています」

「先ほどの〇〇番の青, 通過しました」

(3) 態度決定について

海洋研修実施の態度決定については, 副校長, 主幹教諭, 体育主任で協議し, 最終的に副校長の判断により, 態度の決定を行う。なお, 研修中に急に天候が変化した場合には, 副校長が研修の続行もしくは中断の判断を下し, 全体に指示を出す

（副校長→主幹教諭・体育主任→全職員→児童）。

(4) 事故発生対応について

- ① 水難者を発見した者は、笛を鳴らして周囲の職員と学生を呼び、協力して水難者の救助に向かう。
- ② カヌーに乗っている職員は、カヌーにて現場に急行するとともに、本部へ救助要請の合図を送る（この時点で子どもに意識がないような場合には、体育主任が養護担当の職員に119番の連絡を直ちに行うように合図を送る）。
- ③ 他の職員は、遊泳中の他の児童に対し、現在地から陸に向かって最短距離を泳ぎ、陸に上がるよう指示を出し、子どもたちと一緒に陸を目指す。
- ④ 養護担当の職員は、拡声器と携帯電話、AEDを持ち、水難者が運ばれる場所に行く。
- ⑤ 救助した職員を中心に必要に応じて救急蘇生を行い、養護担当の職員は状況を直ちに判断し、119番に連絡が必要な場合（②の時点で連絡していない場合）は、携帯電話で連絡する。
- ⑥ 学級担任は、学級ごとに子どもを海とは反対側を向かせて並ばせ、点呼を行う。
- ⑦ 水難者の担任と副校長、蒲地（救急）が救急車に乗り、病院へ向かう。
- ⑧ 養護担当の職員は、状況に応じて水難者の保護者へ連絡を行う。

8 職員の反省

(1) 活動日程

- ① 実施時期及び日程について
海での活動ということであれば、時期は妥当。活動時期については、このままでよい。遠泳という附小伝統の行事のためには、妥当な日程であった。練習を通して、泳ぎが苦手だった子どもたちが克服に向けて立ち向かう強い心を養うことができると思う。
- ② 宿泊日数について
悪天候の時の対応が気になるが、遠泳のみの活動として、一泊二日でもいいかもしれない。日程については、活動内容とも関わるが、暑い中での野外活動が多く、負担が大きいため検討すべき。例えば、一泊二日にして、これまでの3日目の活動をなくす。万が一、天候が心配であれば、1日目に遠泳を終わらせ、2日目に水俣病資料館に行くというようにすればどうか。
- ③ 本番の日程について
遠泳本番前の食事が長引き、ギリギリまで弁当を食べていた子がいたので、もう少し早めに食事の時間を切って、体調を整え、本番に備えるべき

だったと思う。ただ、本番までの時間をあまり長くとりすぎても間延びしてしまう。また、午前の遠泳練習、午後の本番、そして磯観察と炎天下での活動が続くので、ゼリー飲料等での栄養補給にとどめて午前の活動を長めにとり、本番まで終えた上で昼食という流れも視野に入れてみてはどうかと思う。

(2) 活動内容

- ① 遠泳に向けての練習、本番について
300m遠泳本番では、必死で泳ぎ、泳いだ後も、友達を一生懸命応援する姿があった。一人も欠けることなく目標を達成したことで、子どもたちの自信につながった。遠泳の練習の内容やその他の活動時間も適当であったと思う。練習から本番までを通して、この活動の意味を教員自身がしっかり考えることが大切であると感じた。子どもたちは遠泳の中で葛藤したり悩んだりすることがある。それを乗り越えて一つまた成長していく姿に、どう関わっていくのか。来年以降もまた行く機会があると思うので、それまでに考えていきたい。しかし、本番は、予定よりも早く終了した（全体的にペースが早かったのだと思う）。後半どうしても集団になってくるところもあったので、間隔は十分（60～90秒ほど）とってよい。

(3) 子どもの様子

- ① 本番に向けての意識が高まりと完泳の感動について
300m遠泳本番に向け、練習にも真剣さが増していく子どもたちの姿が見られた。初日は遠泳に対する意識面で指導をすることがあったが、徐々に全員で完泳するという意味付けをして、意識を高めていった。臨海学校までに高める部分と臨海学校の中で高めるというメリハリをもった指導を行っていくことで、子どもたちの達成感も大きくなるのだと感じた。
- ② 生活面の課題について
返事がとてもよく素直だと思う反面、行動につながらないと感じる場面もあった。例えば、館内で走って移動したり、トイレでのおしゃべりしたりなど。大部屋の子たちは騒いでいて何度か指導した。学年の様子によっては洋室棟を前もって希望するなどあってよいのかもしれない。

9 子どもの反省

Hさん

遠泳では、私は泳ぐのが苦手な海に入るのも初めてで、プールとは違って深く不安でしたが、昼練し

ているとき励ましてくれたり、途中で海水を飲んだり焦って進まなかった時に励ましてくれたりした友達を思い出して、みんなの目標の300mを全員完成というものを達成することができました。

Y君

僕の個人目標は、「300m遠泳を泳ぎきる」でした。色々な場面でみんなから助けられたり、一生懸命協力し合ったりしました。だからこそ、とても心に残ったと思います。苦しかったけど、みんなで力を合わせて頑張ったので、全員が完泳することができました。遠泳の掛け声も大きな声で言えて、思い出に残って良かったです。このことを忘れずに、これからの学校生活に生かしていきたいと思いました。

Rさん

私が遠泳でクラゲに刺された時は、友達が持っていた薬を塗ってくれました。とても嬉しかったし、私も何かあった時には、友達の役に立てるようにしたいと思いました。今回の遠泳で300m泳ぐということは、スイミングを習っている私には簡単なことでしたが、全員でゴールまで泳ぎきるという目標を達成するために、平泳ぎが苦手な子に上手く泳ぐコツを教えたり、当日は大きな声で最後の一人がゴー

ルするまで応援したり、みんなで一体となって頑張れたことは、私にとって最高の思い出になりました。今回学んだことを忘れずに、これからの生活に生かしていきたいと思います。

10 おわりに

遠泳の本番が近づくにつれて、子どもたちの姿から意識の高まりを感じた。また、最後の子どもが泳ぎ切った後、みんなでかけよって喜びを分かち合う姿は感動的だった。全員完泳という目標に向けて、気持ちを一つにして取り組んできたからだと思う。

1日目の遠泳の練習では、私語をする場面が多く見られたが、2日目になると、友達応援をする姿などがたくさん見られ意識の高まりを感じた。子どもの様子や臨海学校までの過程を職員が分かった上で、多くの役を用意し、子どもたちに取り組みさせたことに意義がある。この経験が、これからの子どもたちの学校生活に生きることを願う。

文 献

- 1) 文部科学省(2018)小学校学習指導要領解説 特別活動編. 124-126.